シャナの使い魔

ソラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
シャナの使い魔

【Ｎコード】
Ｎ４１６９Ｕ

【作者名】
ソラ

【あらすじ】
ハルケギニアから帰ってきたサイトが灼眼のシャナの世界に巻き込まれる話です。
ちなみにサイトは微妙に強く、おかしくなっています。

異なる世界

東京、秋葉原１週間前に失踪した少年が帰ってきた。

「やっと帰ってこれた！！」
平賀才人と呼ばれる少年が言った。
「へえ、ここが相棒の世界か」
布に包まれたデルフリンガーが言った。
隠していないとさすがにここでも銃刀法違反で捕まってしまう。
「でも俺っちはここじゃ必要ないんだろ」
「ああ、この世界に危険な事なんて・・・・って」
気がつくと火の中にいた。
いや人が燃えているのだ。
しかもマヨネーズのマスコットキャラそっくりな三頭身の人形と
有髪無髪のマネキンの首を固めた玉が現れていた。
いずれも人の身の丈の倍はあった。
人形は燃えている人間の火を吸い、そしてそれは小さくなっていく。
「ん～？　なんだい、こいつ」
「さあ？徒では・・・ないわね。ミステスかしら。ご主人様にいい
お土産ができたわ」
人形が手を伸ばしてくる。
「くそっ、いきなり何なんだ！！」
サイトはデルフを抜こうとする。

その時、何者かが落ちてきた、
人形の腕を切り落とし、落下の衝撃で吹き飛ばされたサイトの前に
下りてくる。
「どう、アラストール？」

「徒ではない。いずれもただの燐子だ」
人形が少女を襲うがなんなくかわし足を斬り、倒れた人形の頭を斬り落とした。
次に首玉が突っ込んでくるが蹴り飛ばす。
すると真反対から影が飛んでくる。
少女は呆然としているサイトのすぐそばを斬る。
サイトが後ろを振り返ると腕を斬りおとされた女がうずくまっていた。
「炎髪と灼眼……アラストールの？フレイムヘイズ？か……この、討滅の道具め……！」
「ふん」
片手で刀を大きく振りかぶる。
少女が、あまりに平然と取ったその動作にサイトは反応した。
デルフを抜く。
「やめろ！」
女をかばい前に出る。
（誰も殺させない！）
過去に誓った思いがよぎる。
しかし刀より先に手が背中から入ってくる感触に襲われる。
「そうわさせないわ」
少女はためらいもなくデルフをはじきサイトを袈裟切りにした。
後ろの女からは小さな人形が飛び出し逃げていった。
「あの？燐子？の言い方からすると、案外大きいのが後ろにいそうね」
少女の胸元のペンダントが答える。
「久々に？王？を討滅できるやも知れぬ」
「うん、それにしても」
「うううう、ぐ・・・・」
（くそっ・・き、斬られた・・・・・）
少女は自分の足元、路面に仰向けに倒れてうめくサイトに目をや

る。
「さっきはびっくりしちゃった。コレが動いているってこと、すっかり忘れてたから」
「そうだな。我も一瞬、？天目一個？のことを思い出して慌てた」
「ま、あのときは最初っから飛び掛ってきたし……」
「うう、うぐはっ！？死ぬ！！！」
いい加減苛立った少女が、ぼんと、サイトを蹴飛ばした。
「あーもう、うるさいうるさいうるさい。今さら、斬られたくらいで騒がないで」
ペンダントもそれに容赦なく続ける。
「生前の器が知れるわ、痴れ者めが。人間なら、その深手を受けた時点で即死だ」
「確かに・・・この傷で助かるわけ・・・あれ？」
見ると体の半分が切られてぶら下がっていた。
「うわあああ！！！」
いまだかつてない衝撃だ。異世界に召還された時もこんなにあわてなかった。
少女が近づいてきてサイトの体をくっつける。するとあっという間にもと道理になった。
そして落ちているデルフを拾い上げる。
「ふ～ん。これ何かの力があるみたいね。」
「おい。放しやがれ」

デルフが噛み付くように少女の手の中で暴れた。
「えっ！あなたフレイムヘイズだったの？」
「はっ？フレイム・・何？」
息も絶え絶えで才人は答える。
「いや。フレイムヘイズではないはずだ。これは話す宝具なのだろう」
「おい！返せ」

「まあ、いいわ。どうやって人間が手にいれたか知らないけど」
あっさり返してくれたデルフを元の鞘に入れる。
少女はサイトのことは無視して、右の人差し指を天に向けて突き立てた。
すると町は元道理になっていた。壊された物も修復されている。
しかし自分や人々の中に普通の人が見えない炎が見えた。
「なんだこれは。どうなっているんだ？」
歩いていく少女の腕をつかむ。
「うるさいなあ、もう」
冷たい、顔だった。
まるで騒がしいラジオでも見るような。
相手の人格を認めない……いや、そんなものなど最初からないと認識しているかのような。
「コレ、消そうか」
「な……！？」
才人は身についた習慣かすぐに距離をとる。
「待て」
そこにペンダントから静止の声がかかった。
「迂闊に？ミステス？を開けてはならん。？天目一個？のときの騒動を忘れたか」
少女は、ふん、と鼻を鳴らしてサイトの手を離した。
「もちろん分かってるけど、コレ、さっきからうるさくて」
「真実を教えてやればよい。それでコレも黙るだろう」
そしてサイトは自分が住む世界の恐ろしい真実を聞いた。

異なる世界（後書き）

サイトが活躍する話を書いてみたくなりました。

平穏、そして

衝撃の事実から数日がたった。
サイトは家族の下の帰った。
サイトにとっては約1年ぶりだが両親にとっては1週間ぶりなので感動の再会はなかった。
無事？に自分探しの旅ということに落ち着いた。
「何でこんなことになっんだ？」
この数日間いろいろな変異を実感した。
まず自分は人間ではなくトーチだということ。
そして少女の話を裏付けるようにトーチである少年が俺の目の前で消えた。誰にも気が付かれることなく。
それから教室の平井ゆかりの席にその少女がいること。そして平井ゆかりという存在になっていること。
「じゃあ平井さんはもういないのか？」
「何度も言うけどトーチは消えたら存在は残らない」
好物なのかメロンパンをぱくつきながら少女は答えた。
「……あんたの名前は？」
「名前？」
「私は、このアラストールと契約したフレイムヘイズ、それだけよ。それ以外に、名前なんかない」
「他のフレイムヘイズと区別するために贄殿遮那のって付けて、呼ばせてはいたけど」
「ニエトノシャ……？」
「贄殿遮那。私が持ってる大太刀の名前」
「そうか。じゃあ……そうだな、俺はあんたをシャナって呼ぶことにする」
「勝手にすれば？　呼び名なんてどうでもいいし、私は私の役目を

果たすだけ」
「それは、俺を燐子ってやつから守るってことか？」
「守る……？」
シャナは、あからさまに怪訝な顔つきになった。
「ま、おまえに喰いつく奴がいるうちは、そういうことになるかもね」

昼休み、シャナの呼び止める声を無視して教室を出ようとすると
「おい、平賀……！」
その、声をひそめた叫び、という器用な呼びかけに振り向くと、仲のいいクラスメートが三人、彼を手招きしていた。
そういえば、朝からシャナとのことに掛かりっきりで、彼らとは挨拶一つ交わしていなかった。サイトは駆け寄って声をかける。
「みんな、今日は食堂だったのか？」
中学からの友人で、頭も人もいい、メガネマンこと池速人が首を振って答えた。
「違うよ。それより平賀、おまえ、平井と飯が食えるな」
その横、美をつけてもいい容姿を持ちながら、妙に軽薄っぽい少年、佐藤啓作が続ける。
「ホント、勇気のある奴」
「だいたい、おまえらって、そんなに仲良かったか？　抜け駆けは許さん、許さんぞ～」
と絡んできたのは田中栄太。大柄だが愛嬌があるので、粗暴には見えない。
「いや、仲がいいとかそんなのじゃなくて……」
サイトとしては言葉を濁すしかない。まさか本当のことは話せないし、話したくもない。

（こんなことを話てる場合じゃないけどな）
サイトはふと、異世界の事を思い出す。ろくな別れも言わずに帰っちゃたからな・・・
「二人っきりで弁当食べて会話して。十分そんなのだろう」
「平井ちゃんも、確かに可愛いといえば可愛いけど、なんつーか、マニアックな趣味だな」
「実はロリ属性持ちだったのか。侮れん奴め」
「あのな……」
「そういや平賀、その手どうしたんだ？」
「えっと、旅行で怪我したんだよ」
左手のガンダールブの証は消えなかったので包帯を巻いて隠してある。
「とにかく・・・」

その時、世界が赤く染まった。

ありとあらゆるものが静止する。
「来たわね」
シャナは黒のコートを纏い、贄殿遮那を取り出し構える。
「まだみんながいるんだぞ！」
「封絶したのは敵よ。向こうに言えば？」
同級生をどけようとするが・・・重い。
窓にトランプが現れたかと思うと増え窓を突き破ってきた。
サイトはシャナのコートに守られたが皆は違った。
「皆！！大丈夫か！？」
いそいでかけより応急手当てをしようとするが静止しているためうまくいかない。
後ろでシャナと人形が戦っているが気にならない。
（くそっ俺のせいで）

「うふふ、有益な威力偵察、と言って欲しいね」
と奇妙に韻の浮かせた声がした。
「こんにちは、おちびさん。逢魔が時に相応しい出会いだ」
触れれば輪郭がかすれそうな、線の細い美男子。紡ぐ声は、調律の狂った弦楽器のような、妙な韻を含んでいる。
サイトは直感する。
（こいつが、紅世の徒だ）
「あんたが主？」
「そう、フリアグネ、それが私の名だ」
アラストールが、わずかに声を低くして言う。
「フリアグネ……？　そうか、フレイムヘイズ殺しの？狩人？か」
「そう言う君は、我らが紅世に威名轟かす天壌の劫火アラストールだね。直接会うのは初めてかな。こっちの世界に来たこと　は聞いていたけれど・・・君のフレイムヘイズも初めて見たよ」
ついで、シャナに目をやる。
「……なるほど、これが君の契約者炎髪灼眼の討ち手か……噂にたがわぬ美しさだ。でも、少し輝きが強すぎるな」
勝手な感想を並べるフリアグネをよそに、アラストールは小声でシャナに注意を促す。
「なよなよした見かけや言動に惑わされるな。多数の宝具を駆使し、フレイムヘイズを幾人も屠っている強力な王だ」
「うん、感じてる」
シャナは足裏をわずかに擦って、踏み込みの態勢を取る。
「ふふ、そんなにしかめっ面をしなくても・・・」
声が止まる。
「ふざけんな！！」
サイトは壊れた机の脚を握り男に飛び掛かっていた。
しかし男が持つ鎖にはじき飛ばされる。
「っつっぐは」
「何やってるの！」

「くっそ。デルフさえあれば・・・」
デルフは自分の部屋に置いてある。武器なければなにもできない自分が嫌になる。
「ケンカの押し売りかい？　無粋な子だなあ・・・おもしろいミステスだ」
フリアグネは、表情を薄笑いにして、サイトに視線を流した。
「別に急ぐでもなし……もう少し、やりやすい状況を作ってから、また伺うことにするよ」
「なにが入っているのかな、その中……うふふ、楽しみだ……」
その薄白い姿が、妙に浮いた声が、その背に負った陽炎の壁の揺らぎと混じり、溶けてゆく。
その揺らぎに目を焼く内に、気付けば、フリアグネは去っていた。

平穏、そして（後書き）

とりあえず原作を追ってみます。
初めてなので勝手がわかりません。

それからの行動

その夜、
サイトは雨が降っているのに屋根にいるシャナを部屋に入れてやっていた。
「ちょっと待てよ！」
シャナがここにいると言うので困っているのである。
「俺んちには母親がいるんだぞ」
「お前を守るためになんでわざわざ別の部屋にしなくちゃいけないのよ」
「あきらめな相棒」
サイトはしかたなく肩を落とす。
「はあ～・・何やってんだ？」
シャナはペンダントを枕の下仕入れている。
「着替えているの。だから見えないところに行ってもらったの」
「そういうことだ。貴様も早く隠れろ」
アラストールに言われしかたなく押入れに隠れる。
（なんで俺がこんな目に・・・）
シャナがごそごそと着替える音がする。
「着替えとかあるのか？」
「覗くなって言ったでしょ！」
「覗いてねえ！だいたいのもんはベットの横の引き出しに入ってる。」
サイトはムカムカしてきたのでこっそり扉をすこし開け覗くことにした。
（・・・なんというかやっぱり残念）
サイトの好みではない。もうちょっとというか大分大きさが足りない。
そんなことを考えていると危うく後ろのおもちゃを倒しそうになっ

た。
（危ねえ・・・しかし俺は同じ鉄は踏まない男だ）
向こうの世界での暮らしを思い出してしまう。
しかしゆっくりと置いた足がちょうど尖った鉄をふんずけた。
「痛ってええええ！」
気が付くとふすまを押し倒して外に出ていた。
目にしたのは服を全部脱いで小さな布だけを持っているシャナだった。
「・・・・」
シャナは茫然と見ている。
「いや違うんだこれは・がっつ！・・・」
サイトは人間ではありえない力でぼこぼこにされた。

翌朝、無駄に空は快晴。
（・・・なんだか柔らかいな・・・）
抱きしめている感触を楽しむ。
あまりにも柔らかくて暖かい。
「これは・・・？」
目を開けるとシャナの顔が目の前にあった。
「はっつ！！！」
いそいで飛び退く、昨日やられた痛みを忘れたわけではない。
昨日は俺がベットで寝ていたはずだ。
それでシャナは外に行くって言ったきり帰ってこなかったはずなんだが。
「なんでだ！？」
「ふん！目を覚ましたか？」
「これは不可抗力だ！！！」
「当然だ。でなければ貴様の命はない」
「なんでここで寝てんだよ！」

「昨日帰ってきた後、寝ぼけてベットに潜り込んでしまったのだ」
「なるほど・・・って早く逃げないと！」
「ん～おはよ、アラストール・・・？」
絶妙のタイミングでシャナが起きる。
「いや～おはよう。シャナ」
サイトはさも当然のように挨拶をしたが
「お前は一度とならず二度までも・・・」
サイトは今度は刀で殴られて気絶した。

「それにしてもこのミステス全然灯りが減ってない」
「うむ、気づいたか。中にある宝具の力なのだろう」
気絶したサイトを見下ろてシャナとアラストールは話す。
「そりゃ相棒がガンダールブだからだよ」
壁に立てかけてあるデルフが話す。
「その話は聞いたわ。到底信じられないけど」
「なんでかね。嬢ちゃんだって異世界があるのは知ってんだろう」
「うむ。しかしすぐに信じられるわけではない」
「まあ、そりゃそうか・・・それより相棒の中にある宝具ってのはもしかして・・・」
デルフはそれきり黙ってしまった。

「今日は学校を休んであいつを探す」
目覚めたサイトはシャナに言った。
「いいけど、あんたはあたしから離れないでね」
今もトーチにされている人がいるってのにのんびり学区に通ってる暇なんてねえ。
俺の親しい人もトーチにされてしまうかもしれないのだ。
「わかってるよ。それよりあいつがいそうなところってわかるのか？」
「そんなのわかるわけないわ。餌としてはお前がいるけど・・」

「・・・あいつらは存在の力を喰ってるって言ったよな。」
「そうだけど」
「つまりあいつらの餌であるトーチを片っ端から消したら出てくるんじゃねえか？」
「うむ。確かに一理ある。しかしお前はいいのか？まだ存在してる物を消すのだぞ」
「生きてる人のほうが大事だ。どうせ俺も消えるんだからな・・・」
サイトの自虐的なセリフにシャナは少し気にかかる。
「どうかしたのか？」
「なんでもない、アラストール、行きましょう」

シャナがトーチの存在の力をどんどんと消費していく。
人がどんどんといなくなっていく。
もう生きていないといっても気にならないわけではない。
（いつか俺の消えてしまうのか）
どうせあの時死んでいた命なんだ。なら有効利用するだけだ。
サイトは少し前向きになる。
「これで５６個目ね」
シャナは腕を下した。
「もしあいつが現れたら俺にかまわず倒してくれたらいい」
「わかってるわよ。お前はただのトーチなんだから」
シャナは自分のセリフが冷たいと自覚した。
（なんでトーチのことなんか気にしなきゃいけないのよ）
「よし、どんどん行くわよ！」
気持ちを振り払うように足を踏み出したとき
「シャナ！」
サイトは何か気持ちの悪い感じがしたと思うとと世界が止まった。
つまり徒による封絶だった。
「！へえ、わかってきたじゃない」
シャナはすぐ炎髪灼眼になる。

「シャナ、デルフを出してくれ」
「いいけど、引っ込んでなさい」
シャナが黒いコートから朝に入れといたデルフを取出しサイトは受け取る。
「全く、ひでえ目にあったぜ。あのコートの中、気味悪い刀とずっと一緒だったんだぜ？」
「我慢しろよ」
「狩人の登場ね」
シャナが示す方向を見る。
そこにはフリアグネが宙に浮いた状態で立っていた。
「いやはや困った子らだね」

それからの行動（後書き）

文章なんて苦手さ、はは・・

衝突

「いやはや、まったく困った子だね」

「あんたこそ真名の割りに辛抱が足りないんじゃない？フリアグネ」

シャナはそういい大太刀を構えて腰を下ろす。

その前にサイトが出てきた。

「ちょっと！」

「おい、フリアグネ。俺が目的なんだろ？これ以上、他の人をトーチにするのはやめろ」

「それは無理な相談さね。だって生きるために他の生物を殺すのはしかたないじゃないか」

フリアグネはあきれたようにサイトを見下ろしてきた。

「ふざけやがって」

デルフを抜き放ち、フリアグネに飛び上がる。

しかしフリアグネは元いた位置より上昇し、サイトの攻撃は届かない。

「どいていなさい」

シャナは言葉と同時に足裏を爆発させて上昇。

フリアグネに斬りかかる、がフリアグネは余裕の表情でかわす。

「今日は人形遊びじゃないの？」

シャナは挑発の声を上げる。

「もちろん用意してあるとも」

するとシャナとサイトを炎がとりこ込みその中から数十の人形が出てきた。

シャナとサイトは背中合わせで人形と対峙するようになる。

「いい、私はお前のことを守ったりしないから」

「わかってる。別にそれでいい。それよりあいつをとっとと倒してくれ」

「じゃあ、始めようか」
人形が一斉に襲い掛かってきた。
サイトは正面から来た人形を両断する。
次に左右から同時にくる敵も素早くかわし次々に切り裂く。
その速さは人間に勝り、フレイムヘイズにも劣らない。
「なんなのよ、あいつ」
「うむ、案外あやつが話した事は本当かもしれんな」
シャナはサイトの後ろ側で言葉とは裏腹にサイトのことを気にしていた。
その間にもサイトは目にも留まらぬ速さで人形を倒していく。
しかし次の人形に斬りかかった時、人形が爆発した。
「うわあああ！」
爆発の衝撃はデルフでは吸収できない。
吹き飛ばされたサイトをシャナが止める。
そしてシャナは爆発をものともせず獲物に斬りかかる。
サイトはなんとこ起き上がるがダメージが大きく戦闘に加わることができない。
シャナは爆発をすり抜け人形を撃破している。
そこにフリアグネが鎖を投げ、それはシャナの刀にまとわりついた。
「ふふふっ、どうだい私のバブルルートはその刀がどれほどのものだろうと斬れないよ」
シャナは大太刀を引くがびくともしない。
「なら、持ち主ごと斬る」
シャナは立ち上がりかけているサイトを見て安全か確認する。
人形が進路上にいるが蹴散らして爆発する前に通り抜ければ問題ない。
「何だ？」
その時、サイトは感じていた。
フリアグネが鎖とは別の手に持っているハンドベルから何か波長がでているのを。

「あのハンドベルが共鳴している？」
そう思った時、シャナは飛び出した。
「危ない！！逃げろ」
サイトは体の痛みも振り切って走り出す。
なんとかシャナの前に飛び出し鎖を斬り払う。
「っつ・・」
フリアグネが始めて動揺した表情をする。
その間にもハンドベルは揺れている。
サイトは鎖が離れたせいでバランスを崩したシャナを突き飛ばす。
「何！？」
そこでベルの音が鳴る。
大爆発が起きた。
サイトはその身に衝撃を受け上も下もわからない状況になり気絶した。
「はは、どうだい私のダンスパーティーの威力は、とは言ってもミステスを破壊してしまたかな」
フリアグネの声が爆発で巻き起こった粉塵の向こうで聞こえる。
「あのバカ！！」
シャナは粉塵の中に突っ込む。
そこにはサイトを抱きかかえたフリアグネがいた。
サイトはぐったちとして頭から血を流し、デルフリンガーを持っていない。
「中になにが、あるのかな？」
フリアグネはサイトを見て愉悦に顔を歪めている。
シャナはそこに切り込み必殺の一撃を繰り出そうとした。
フリアグネはそこにサイトを突き出した。
シャナは攻撃を止めてしまう。
「っつ！？」
シャナは攻撃を止めたことに戸惑い一瞬動きを止める。
その隙にフリアグネはサイトを抱え飛び上がった。

「ははは！　アラストールのフレイムヘイズ！　まだ戦う気があるのなら、このミステスが惜しけれ　　ば、街の一番高い場所まで来るがいい！」
フリアグネは飛び去って行き、残された人形が一斉に爆発する。
爆風が去ったあとそこに残ったのは後悔を顔に滲ませたシャナと地面に突き刺さったデルフが残されていた。

衝突（後書き）

サイトってどんな性格だったかな？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4169u/

シャナの使い魔

2011年7月5日21時58分発行